



Title	＜翻訳＞VALLE-INCLÁNの「マリオネットのためのメロドラマ」 『造花のバラ』 および『洗礼者の首』 翻訳
Author(s)	堀内, 研二
Citation	Estudios Hispánicos. 2004, 28, p. 49-81
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93885
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

VALLE-INCLÁN の「マリオネットのためのメロドラマ」 『造花のバラ』および『洗礼者の首』 翻訳

堀 内 研 二

筆者は *Estudios Hispánicos* 27において「Valle-Inclán のふたつの「マリオネットのためのメロドラマ」にみられる物欲と色欲と死について」という論文を発表した。ここではその際に翻訳を試みた二作品『造花のバラ』と『洗礼者の首』を紹介したい。なお、翻訳にあたっては、Ramón del Valle-Inclán: *Retablo de la avaricia, la lujuria y la muerte*, Clásicos Castellanos, Editorial Espasa Calpe, Madrid, 1996を使用した。

造花のバラ

マリオネットのためのメロドラマ

登場人物

病床の女
シメオン・フレペ
ムサ
ディサ
近所の女房
酒場の女将ルドビーナ
雑貨屋ペペ
老婆
泣き女
幼児たちのコロス
通りの声

朝の淡い光。^{みぞれ}霰まじりの冷たい雨。道の四つ辻にたつシメオン・フレペの鍛冶場。

シメオンは鍛冶屋のかたわら合唱団員および死者の理容師の仕事をつとめる。顔色が悪く、煤に汚れ、アルコール中毒者特有の咳、アナーキスト風のぼさぼさ髪。酒場の雄弁家でアニス酒の熱烈な信奉者である。シメオン・フレペは墓掘り人夫もしくは死刑執行人の憂いのような奇妙な雰囲気をつたえ、かたわらに四つのグラスを置いている。鉄を叩く音。憔悴しきった女がベッドに上体を起こし、両手で耳をふさぎ悲痛な声を上げる。

病床の女 あたしを殺す気、罰当たり！頭が割れそうだわ！やめて、その恐ろしい槌の音！
フレペ 仕事が男を蘇らせるんだ！
病床の女 この飲んだくれ！今日仕事をする気になったのは、あたしが死にかけているからね、そうでなければ、酒場に行っているところだわ。
フレペ お前の悪口なぞ屁とも思わねえよ。
病床の女 神様、どうかあたしをこの世から連れ出して！
フレペ そうは問屋がおろさねえ！
病床の女 薄情者！
フレペ 確かに俺は薄情者さ、だがそういう男を選んだのはお前じゃねえか！
病床の女 あんたにできることといたら人を騙すことだけよ！
フレペ フロリアニータ、結果にいさぎよく従うんだな。
病床の女 この人でなし！
フレペ それほどでもねえさ。
病床の女 この悪党！
フレペ さて出かけるとするか、お前を殴らねえですむようにな。
病床の女 待って！
フレペ うるせえな！
病床の女 ねえ、ちょっと！
フレペ 風の音で聞こえねえよ。

フレペ、帽子を斜にかぶり、戸口に向かう。寒風が雨の灰色のカーテンを絡ませ、雨が敷居を叩く。病床の女は上体を起こし悲痛な声を上げる。

病床の女 ねえ、聞いて！
フレペ 何だい？
病床の女 終油式を頼んできて。ちょっと待って。このぼろの包みに七
千レアルのお金が縫いつけてあるの。
フレペ 悪い話じゃねえな。
病床の女 ひどい苦勞して貯めたお金よ！ずぶ濡れになってあちこち歩
き回ってね！おかげでこの命を取られるはめになってしまっ
たわ！
フレペ まるで椿姫きどりだな！
病床の女 そんな風にしか言えないのね！
フレペ じゃ、どう言えればいいっていうんだ！
病床の女 あたしの汗の結晶、あんた酒場で使い果たしてしまうのね！
フレペ 金の包みを見せてくれ！
病床の女 だめよ！待って！触れるだけならいいわ……でも、持ってい
かないでね。すぐにあんたのものになるわ。この目が閉じる
まで待って。触れるだけならいいわ。
フレペ どれ、金のようにだな！
病床の女 七千レアルよ！どんなに苦勞したか！
フレペ お前ってすごい女^{やつ}だな！
病床の女 持っていないで。ほんのちょっと待てばいいの。触って、
触って、好きなだけ。
フレペ よく数えたんかい？
病床の女 汗と涙の結晶の七千レアルよ！
フレペ 間違いじゃねえだろうな？
病床の女 なんども繰返し数えたわ！
フレペ すべてお札かい？
病床の女 百レアル紙幣よ。
フレペ すごい女^{やつ}だ！最高だよ。とびっきりすごい女^{やつ}だ！
病床の女 シメオン、子供たちの面倒をよくみてね、それからあたしの
汗の結晶を酒場においてこないでね。
フレペ 俺を信用してねえんだな。
病床の女 あんたのことはよくわかってるわ、シメオン・フレペ！
フレペ 俺様も自分の務めはよくわかってるよ。

- 病床の女 酒に使うお金、あんたの子供たちから盗むことになるのよ。
立派な人になって！
- フレペ その点では俺は誰にもひけは取らねえつもりだ！
- 病床の女 あたしに終油を受けさせてね！
- フレペ なんなりとお望みどおりにしてやるよ。お前はそうしてもら
うのにふさわしい女だからな。かならずしてやる！俺はあら
ゆる狂信的行為を尊重してるからな。
- 病床の女 帽子を脱いでちょうだいね、この家にイエス様がお入りにな
るときには。
- フレペ 礼儀は十分わきまえてるよ、フロリアナ！
- 病床の女 ペパおばさんのところに寄って行って。子供たちの顔を洗い、
新しい服を着せるように頼んで。いとしい子たち、みんなたっ
たひとりぼっちになるのね！
- フレペ フロリアナ、そんなに哀切ぶっても俺は騙されねえぞ！お前
ときたら今にも死にそうな口のきき方をしてる！それはねえ
よ！
- 病床の女 終油式のこと頼みましたよ！
- フレペ それはまだ早い。金の包みどこにしまったんだい？
- 病床の女 お尻の下にあるわ。急いで、シメオン。あたしは終油式を早
くすましたいの！
- フレペ まったく気丈だな、お前って女^{やつ}は！
- 病床の女 早く行ってきて。

フレペ、帽子を目深にかぶり、肩をいからせて退場。足音が遠のくと、病床の女は金の包みを抱きかかえ上体を起こす。シュミーズ姿でふらつきながら、屋根裏部屋へ通じる階段を上る。屋根裏部屋の床の上を休み休み歩くもつれた足音に混じって、彼女の苦悶の声が聞こえてくる。寒さにうち震えながらも慎重な足どりでふたび階段に姿をあらわす。這いずるようにしてベッドにたどり着き、継ぎ当てだらけの毛布にもぐりこむ。死人の表情をし注意を凝らし、ぼろ布団の山の上で横向きになり、天井の羽目板を数える。今しがた隠してきた宝のありかを頭の中に刻み込んでいる。噂好きの近所の女がふたり霧雨に煙る灰色の人影となって、戸口から中に飛び込んでくる。水滴のしたたる濡れたスカートをこきざみに震わせながら、厳しい寒さをあれこれ口にしてている。外から子供たちがひきずる鉄釜の音が聞こえ、

イワシを焼く匂いが漂ってくる。今登場したムサとディサ——ペピーニャ・ムスと
ファナ・ディス——は近所の女房たちである。

ムサ フロリアナ、偉いわね、おとなしくベッドに寝ていて。気分
はどう？

病床の女 死ぬところよ！

ムサ そういえば顔色があまりよくないねえ！

ディサ で、医者は薬を処方してくれないのかい？

病床の女 もうサジを投げられたわ。

ムサ 医者なんか呼ぶことはないよ、フロリアナ。一ドゥーロ使う
んだったら、聖ブラス様にミサを上げてもらうよう頼むんだ
ね。医者や薬に使うより、ずっと効き目があるから。

ディサ 医者にはいつだって知らせておいたほうがいいよ。さもない
と……クルセスお婆さんが死んだときのこと思い出すんだね！
医者が死亡診断書を出さなかったもんだから、えらく費用が
かかることになった、訴訟沙汰になったからね。

病床の女 裁判所ときたら、ほんのささいな口実で十分ですからねえ、
ひとつの家を台無しにするには。

ムサ で、あんた、そんなにも体が弱ってるんだったら、終油式の
こと考えなくていいの？

病床の女 シメオンが頼みに出かけたわ。

ディサ もう告解はすませた？

病床の女 昨日の午後に。この世のこともあの世のことも弁明しておい
たわ。

ムサ ずいぶんと手回しがいいんだねえ！

病床の女 あたしは神様の思し召しに従います。

ムサ どうかその覚悟が称えられんことを！たとえ今回がその時で
ないにしても、あんたのいさぎよさは立派だよ、フロリアナ。

病床の女 ああ、もうだめ！

ディサ 煎じ薬飲まない？

ムサ アニス酒少し飲んだら暖まるよ。

病床の女 ベッドの猫を追い払って！

ディサ どこに猫がいるのさ？

ムサ 錯乱だよ、ディサ。ごらん白眼を剥いてるから、ご臨終みたいだ。

病床の女 その猫を追ひ払って！

この時シメオン・フレペ通りから登場。帽子を斜にかぶり、千鳥足である。噂好きの女たちを見て片足で床を大きく踏み叩き、髪を掻きむしる。

フレペ こんちきしょう、すぐに離れろ！手を挙げろ。

ムサ 大騒ぎしないで、この飲んだくれ！

フレペ そのベッドから三十歩離れろ！

シメオンふところからドーナッツの紙包みを取りだし、ふらつきながら歩いていき、継ぎ当てだらけの毛布から出ている死人のような手にそれを渡す。

フレペ フロリアナ、どうか言ってくれ、このろくでなしどもがここで何してたかを？

病床の女 その猫を追ひ払って！

ムサ ああ言っであんたを斥けてるのさ！

フレペ、両手を毛布に入れ、ぐったりした亡霊の体の下を探る。彼女は臨終の苦悶の喉鳴りをたてている。フレペは立ちあがり、髪を掻きむしる。

フレペ こんちくしょう！すぐにそのドアを閉めろ！盗んだものを出せ！この女の汗の結晶を、子供たちの日々の糧を！

ムサ あんた無茶なこと言わないでよ！

フレペ ひでえ盗人たちだ！

ディサ 盗人はあんたじゃないのさ、そう言っであたしたちの評判を奪うんだから！

フレペ 包みに縫いつけた七千リアルを誰が盗ったんだ？

ムサ 金の包みだって、今いくらって言った？

フレペ 七千リアルだよ！

ムサ 世迷いごと言わないで！

ディサ この飲んだくれが！

フレペ 七千レアルだ、百レアル紙幣で！
ムサ いつ宝くじに当たったんだい、シメオン？
ディサ どこで七千レアル見たのさ、絵の中かい？
フレペ ばかやろう！この殉教者の鑑^{かがみ}がひもじい思いをして貯めたんだ！フロリアニータ、このろくでなしどもを黙らしてくれ。
ディサ フロリアナ、疑いを晴らして！あたしたちがベッドに触れたかどうか言ってやって！
ムサ そのままにしておやり、昏睡に入ったから。あたしが思うに、口はきけないよ。
フレペ すぐに盗ったものを返せ！

ペピーニャ・デ・ムス、大げさな仕草でベッドの上に身をかがめ、ドーナッツの紙包みをしっかり握る硬直した手に触れ、羽根をむしった手羽のような片腕を振りながら話す。

ムサ 帽子をとって、跪きなさいよ、シメオン・フレペ！
フレペ それじゃあ？
ムサ 亡くなったよ！
フレペ かけがえのない人をなくしてしまった！
ディサ もう冷たくなってる！あたしはこの人でなしが入ってきたときに亡くなったんだと思うよ。あの大きな溜め息は息をひきとるためだったんだ！

シメオン、帽子を脱ぐ。メロドラマめいた調子。噂好きな女たちから目を離さないように後ろを振りかえりながら歩き、ドアを閉める。つまずいて壁にもたれかかり、帯の間に鍵をしまう。

フレペ これから金の包みを探すことにする。もし出てきなかったら、あんたらに一発撃ち込んで、そのはらわたを喰ってやるからな！
ディサ そんな御託を並べるのはよしてくれ、大酒喰らい！亡くなった人を敬うがいい！
ムサ お祈りの邪魔をしないでよ、フレペ！

フレペ 金の包みが出てきなかったら、お前たちをメッタ刺しにしてやるからな！

シメオン、毛布の中を探す。やきもきしながら煤に汚れた青白い手をベッドの中にしずめ、故人の体を動かす。

フレペ ちきしょう！ここには何もねえぞ！このろくでなしども、盗っ人ってことで死ぬ覚悟をするんだな！

ディサ 悪たれ口叩くんじゃないよ、この酔っ払い！

フレペ 念仏でも唱えるんだな！

ムサ ばちが当たるからね、この不信心者！

フレペ 盗っ人めらが何をほざく！

ディサ 悲しみに気が動転してるんだよ、この不信心者！

ムサ もし本当にあったんなら、そこにあるはずだよ！ベッドから遺体をどかしてみようじゃないか。

女たちふたりで死体を持ちあげる。組み合わせた痩せ細った指がほどけ、紙包みのドーナッツがこぼれ落ちる。土気色の指では紫色の爪が尖っている。丈の短いシュミーズから、折れたロウソクのように折れ曲がった脚があらわになる。

ディサ どこに下ろす？床の上では愚弄するみたいだし。

ムサ 長椅子の上に置こう。

ふたりは壁に寄せかけるようにして遺体を赤い狭い長椅子の上に置く。フレペはベッドを持ち上げ、ふとん藁をまき散らし、継ぎ当てだらけのぼろ毛布を揺する。

フレペ ねえ！ねえ！ねえぞ！盗った！盗りやがったんだ！死ぬ覚悟をするんだな、このろくでなしども！

ディサ ああ、どうしよう！みんな出て来て！フレペの家だよ！この残忍な男、あたしたちの首を切るって言ってるんだ！

ムサ フレペ、ならあたしはかんぬきで立ち向かうからね。

噂好きの女たちと酔っ払いの争いの最中に、遺体がうつぶせに転がり落ち、シュ

ミーズの裾が尻までめくれ上がる。屋根裏部屋の階段の降り口に、一枚の毛布に一緒にくるまり、三人の裸の幼児たちが姿を見せる。汚れた髪、泣きべそをかいた目と口。

幼児たちのコロス ああ、かあちゃん！かあちゃん！かあちゃん！

フレペ お前たちの無垢な目の前で、この性悪女たちの喉を掻っ切つてやるからな！

噂好きな女たち、それぞれ部屋の片隅にいて身構える。ペビーニャ・デ・ムスは先の尖った鉄棒を振り回し、ファナ・デイスは鉄床のハンマーを振り上げる。

ディサ さあ、かかってこい、飲んだくれ！来るがいい、脳天を叩き割ってやるから。

ムサ このペパ・ムス様は、あんたの胸を刺し貫いてやる。

フレペ 盗られた！盗られた！盗られた！

幼児たちのコロス かあちゃん！かあちゃん！かあちゃん！

フレペ 母親に死なれたこの子たちを哀れに思わねえのか？こんちきしょう！あんたらの命で支払ってもらうからな！

フレペ、ベッド脇の小箱を開け、中のものをひっくり返す。がらくたのおもちゃの中から錆ついた古い拳銃が出てくる。それは彼が独身時代に持ち歩いていたロマン派好みの拳銃である。今フレペはメロドラマ映画の俳優のような歓喜と怒りにとらわれ拳銃を握りしめる。

フレペ 弾は七つ入ってる！

幼児たちのコロス とうちゃん！とうちゃん！とうちゃん！

ディサ この飲んだくれ！その孤児たちに示しがつかないじゃないか！

フレペ 死ぬ覚悟をするんだな！もうどうしようもねえ！誰が何と言おうとあんたらは死ぬんだ！

ムサ 頭を冷やして、よく探してごらん。お金の包み、本当にあったのなら、出てくるはずだから。

ディサ あたしたちは無実なんだよ、この飲んだくれ！もし死人に口がきけたら、同じように言うだろうよ！

ムサ 藁の中を探してごらん。その前にまずめくれた下着を下ろしておやり、愚弄してるみたいだから。
ディサ それに子供たちに示しがつかない！
ムサ さあ、長椅子に運んで。
フレペ 冷たくなった遺体よ、ただお前だけがこの難事件を解き明かせるのだ！

フレペ、髪を掻きむしる。ひとかたまりになってしゃくり泣きする幼児たちの中から、甲高い声があがる。

甲高い声 お金の包み隠したよ、後でかあちゃん、上の部屋に！
フレペ 坊主、今なんて言った？
ディサ 坊や、あんたのおかげで命拾いしたよ！

フレペ、階段に突進し、すばやく駆け上り、採光窓の下でしゃくり泣きする幼児たちの群れをなぎ倒す。フレペの足の青い踵^{かかと}とサンダルが屋根裏部屋の入り口から見えなくなる。家の周りで近所の女房たちのわめき声がわき起こる。ドアと窓をしきりに叩く音。

通りの声 何かあったんかい？みんな生きてるのかい、それとも死んじまったんかい？誰だい、助けを呼んだのは？
ムサ ふたりの哀れな女だよ！
ディサ あたしたちを殺すって言って、飲んだくれのフレペが脅してるのさ！
通りの声 フレペ、頭を冷やして！ドアを開けて！
ムサ フロリアナが死んだんだよ！
ディサ 何千という金の包みを残してね！
通りの声 ドアを開けて！、血迷わないで、フレペ！
ディサ 鍵をかけて、あたしたちの首を切ろうとしてるんだ！
ムサ そして通夜にだす腸詰を作ろうとしてるんだよ、こいつは！
ディサ 生きているのが奇跡に思える！
通りの声 フレペ、開けろ！開けろ、フレペ！
フレペ そら、鍵だ！

鍵が階上から落ちてくる。フレペ、階段の降り口のところで、ナイフで布切れの縫い付けを切る。金を見つけ、帯の中に包みを隠す。

幼児たちのコロス フロリアナかあちゃん！フロリアナかあちゃん！

フレペ そうだ、涙を流してやるがいい、いとしい子たち！妻と母の
みごとな鑑だった！最高にすばらしい女だった！

フレペ両腕を広げ、階段から身を投げ出し、死者の足元に倒れる。彼女を抱きか
かえて立ち上がる。近所の者たち、家の敷居をまたがずに無言で覗き込む。その静
けさの中、酔っ払いの気取った悲痛な震え声が高まる。

フレペ フロリアナ、妻と母の鑑よ、俺には取り返しのつかないお前
の死を嘆く涙もない！涙もない！俺にはその慰めは与えられ
ない！俺は人でなしだ！俺の心は硬い石でできている！フロ
リアナ、お前と一緒にこの一家は崩壊する！生き返っておく
れ、フロリアナ！

ふたりの噂好きの女、ファナ・デイスとペピーニャ・デ・ムスがフレペの両脇に
行く。デイスは血の気のうせた死者の頭を、ムサは土気色^{かかと}の踵を持つ。ふたりは硬
直したロウ人形を藁ぶとんの上にのせ、シートで蔽う。フレペ、宿命論者の職工の
顔つきで、両手で帽子をくしゃくしゃに丸め、天を見上げながら退場。

デイス 誰か一緒に行って、ひどく気落ちしてるから！

ムサ お棺を頼んできて、フレペ。

坊主頭の裸足の子供が数人、通りすがりに家の中に入ってくる。一様に驚きと悪
意の混じったもの珍しそうな表情。採光窓の下で固まって泣いていた三人の幼児が
ばらばらになる。裸のまま毛布から抜け出し、死者のそばまで下りてくる。

幼児たちのコロス フロリアナかあちゃん！フロリアナかあちゃん！

デイス この子たちに何か着せてあげなくては。

甲高い声 かあちゃん箱から出してたよ、あの後で、新しい服。

ショールを取りに帰っていたムサ、戻ってきて、泣き始める。別の女、シーツに包まれた硬直した体の上に灌水器で聖水を撒く。別の女、ハンカチの端を持ちあげ、死者の顔を覗き込む。

近所の女房　なんて色白なんだろう！まだ三十前だった！立派な殿方たちの求婚を受けていたけど、あんな性悪な男に引っかかってしまった！

ディサ　恋は盲目っていうからね！

近所の女房　硬直する前に死衣を着せたほうがよくないかい？後になったらちょっと厄介だからね！

ディサ　フレペがなんて言うかわからないよ。

近所の女房　あの酔っ払いの考えなんか聞くことはない。このあたしが自分の責任でやるよ。

ムサ　あたしも手伝うよ、あんた！

近所の女房　一張羅の服着せてあげよう。そうしたほうがずっといい、誰かにかたみに持っていられるくらいなら。

幼児たちのコロス　フロリアナかあちゃん！フロリアナかあちゃん！

ムサ、三人の裸の幼児たちの頭上にショールを広げ、このような悲しい場面にお決まりの芝居がかった弁舌を始める。

ムサ　いたいけな天使たちよ、決して忘れるんじゃないよ、お母さんの枕もとでするこの最後のお別れを！お前たちは母親の愛というこの世で一番すばらしいものをなくしたんだよ！これ以上あたしは何も言わない！そのバラのように美しい殉教者の額に最後のキスをしてあげ！

三人の裸の幼児たち、広げられた黒いショールの下でちぢこまって泣きべそをかいている。ペピーニャ・デ・ムス、両腕を広げ、子供たちを死者の上に押しやりながら、別の女房たちのほうを振り返る。

ムサ　この子らの心ときたら石のように硬い！

近所の女房　身近なお手本そっくりときてる！

ディサ 父親と同じでぬけがら同然だよ！
ムサ 言うことをきかない子たちだねえ、お母さんの顔に最後のキスをしてあげるように！それからあたしと一緒にお願い。忘れがたきお母さん、天国からぼくたちのこと見守っていてください！この涙の谷間が青春にもたらす数多くの悪の誘惑に際して、ぼくたちの導きの天使になってくださいって。いいかね、お母さんはこれからお墓に入るんだからね。
幼児たちのコロス フロリアナかあちゃん！フロリアナかあちゃん！冷たくなってるよう！フロリアナかあちゃん！
ムサ 怖がっているんだ！
近所の女房 服を着せてやらねば。
甲高い声 あの後で、かあちゃん箱から出してたよ、新しい服。
近所の女房 主婦の鑑だよ！

ムサ、三人の幼児たちの裸の尻をびしゃりびしゃり叩いてから、屋根裏部屋に上がる階段のほうへ導く。

近所の女房 この子らときたら、どんなに大切なものなくしたかわかってないんだよ！
ディサ 二万レアルも残して！フレペのやつ、それが見つからなかったものだから、あたしたちの喉を搔っ切ろうとした！
酒場の女将ルドビーナ その大金フロリアナが自分でこしらえたんだよ！
近所の女房 主婦の鑑だよ！
雑貨屋ペペ 使いでがあるだろうなあ！
ディサ その二万レアル、酒場に直行だろうよ。
雑貨屋ペペ 底なしだからな！その気になれば、故人のために霊廟を建ててあげることもできるぞ。
近所の女房 それは大げさ過ぎないかい？
ディサ フレペはそれほど悲しんではないよ！
雑貨屋ペペ あんたたち女にもわからないことがあるんだ！
近所の女房 確かに、あの男が遺体を抱きしめるのを見たときは驚いた！キリスト降架の説教さながらだった！
ディサ あの人にもいいところがあるってこと。

老婆 フロリアナ、お前さんはこの世でよく働いたよ！

無駄話をしながら噂好きな女たちは死者を着飾る。濡らした布の先で顔をふき、上体を起こし、新しいスカートと胴着を着せる。ショールをかぶった近所の女が、二本のろうソクの燃えさしを持ってきて、悲痛な面持ちで、その場を取り仕切っている女房たちに手渡す。別の女が走って退場し、組み合わせた土気色の硬直した手を飾る造花のバラを持って戻る。死者の両側で二本のろうソクがパチパチと音を立てながら燃える。

近所の女房 デイサ、ストッキングを探して。このブーツ履けるかしら。ごらん、まだ新調だよ。これだから人生ってわからない！思ってもみななかっただろうよ、墓場に行くときに下ろすことになるなんて！

デイサ 神様の御前に出るために下ろすんだ。こんないい使い方ほかにないよ！

泣き女の老婆、お棺を頭の上に斜にのせて登場。その後から手伝いの子供が蓋を運んでくる。孤児たちが今度は晴れ着を着、毛糸の帽子をかぶり、けばけばしい色の木靴をはいて現れ、ひとかたまりになって採光窓の下で泣く。

幼児たちのコロス フロリアナかあちゃん！フロリアナかあちゃん！

泣き女 この子ら、かわいそうで見ると忍びないよ！どこに下ろしたらいいかね、デイサ？

デイサ どこでもいいよ。

泣き女 で、ご亭主は？

デイサ 埋葬の手続きに出かけてる。

泣き女 肝心なのは支払いを手間取らせないこと。豪華な葬式を頼んだけど、いざ支払いとなったら、どう言うか見ものだよ。十四ペセタだよ、雑費も入れたら十九ペセタにもなる！

デイサ がっばり遺産を受け継いだんだ！

泣き女 それじゃ、故人が二千ペソも遺したってのは本当なんだね？

デイサ いくらかはわからない。それ以上かも知れないし、それ以下かも知れない。

泣き女 ずいぶんと儉約家だったんだねえ、フロリアナは！
近所の女房 主婦の鑑だよ！
泣き女 いい儲け口があったのさ。それはそうと、まだお祈りをあげてなかったよ！

死体の前にひざまずく。ろうソクの光が揺らめいて、汚れのないほとんど半透明の不動の横顔を際立たせている。固く組み合わさった手の中では、造花のバラが炎のように赤く燃えている。泣き女はお祈りが終わると十字を切る。

泣き女 娘のような手をしてる！
近所の女房 結婚前は色気があったけど、この頃は見る影もなかった！
泣き女 死顔が微笑んでるよ！こうして、体を洗い、身なりを整えてやると、まるで《マリアの娘》修道会の修道女みたいだ。それにしてもみごとな衣装だねえ！派手な花柄ショール、上等なスカート、すそにリボンのついたペチコート、新調のブーツ、それから縞柄のストッキング。まるで花嫁みたいだよ！
近所の女房 主婦の鑑だよ！
泣き女 いい儲け口を知ってたのさ。さてと、もう一度お祈りをあげさせてもらおうかね！

シメオン・フレペ、千鳥足で登場。パンジーと輝く真鍮の枝葉飾りで作った葬式用の花輪を肩まですっぽりかぶっている。それはドイツ感傷主義風というかブルジョア趣味の装飾過多の花輪である。フレペは酔っ払って雄弁になっている。

フレペ 妻の鑑よ、墓地でお前に最後の捧げ物をあげよう！ロス・アミーゴス合唱団がお前のためにラ・マルセイエーズを歌う。俺は悲しみに心を貫かれていても自分の持ち場は離れられない。労働者階級が辛酸を嘗めているこの世から自由になったお前の魂のために、面影を慕うお前の夫が、お前の汗の結晶のほんの一部を葬儀に使っても、許してもらえらるだろう。正真正銘の妻の鑑よ！何らかけることのないしかるべき栄誉をお前は手にすることだろう。そのことは悲嘆に暮れるこのお前の夫がしかと請合うよ。ロス・アミーゴス合唱団が名誉団

員のための花輪をお前に供えてくれる。

シメオン、死者の足元に花輪をおいてから、両手で帽子を握りしめ、後ろにさがってその効果のほどを見る。近所の者たちは沈黙を守っている。金色の飾り紐のついたお棺の中の死者は、ロウ人形のような荒涼とした感じ、庶民的でドラマチックな感じを帯びている。胸元で結ばれた花柄のショール、髪形のためにぴんと張った眉、袖口の白いフリルから出ている両手に握られた造花のバラ、てかてか光るエナメルブーツ、これらが痛ましくも残酷な不調和というか、理解しがたい審美的範疇のようなものを創り出している。

フレペ フロリアナ、そのバラを手にしたお前はまさに天使のようだ！
フロリアナ、輝かしい星よ、ここにおられる情け深い方々がお前をあでやかに着飾ってくださった！近所の人たちみんながお前に先立たれた俺のことを気の毒に思ってくれてる。ロス・アミーゴス合唱団が名誉団員のための花輪を供えてくれたよ。何か言っておくれ！お棺の中でじっとして動かないお前は、この政治世界の日常性には耳を貸さないんだね。悲しみにうち勝ってこう言おう、存在するのはただ虚無だけだと。みなさん、驚かないで、これは現代の綱領なんだから。

ムサ お黙り、この酔っ払い、故人さえもあきれ果ててるみたいだよ！

フレペ 俺は何も失礼なことしてないよ。フロリアナ、そのバラを手にし、縞柄のストッキングをはいたお前はまさに天使のようだ！舞台にあがる用意ができたようだな、これは見物だぞ！天国の門ではすごいものが見られる！くそっ、お前があの色っぽい歩き方で現れたら、みんなあっけにとられるぞ！

泣き女 俗物ならそういうことになろうけど。

近所の女房 口にチャックをしなさいよ、フレペ。

フレペ くそっ、俺の女房はこんなにもイカしてたのか、なのに肌がこんなに白いことも知らなかったとは！そのバラを手にし、縞柄のストッキングをはいたお前は、まさに最高の歌姫のようだ！

ムサ お前さん、なんかいかがわしい飲物を飲んだようだね！

フレペ　　ここから出ていけ、このえせ信者に遣り手婆ども！
ディサ　　お黙り、この破廉恥男！
フレペ　　俺は夫だ！

フレペ、両腕を広げ、ふらつきながら死者に向かう。女たちはあきれ果て大騒ぎし口をはさむ。

近所の女房　落ち着きなさいよ、シメオン！
ディサ　　しっかりしなければ！
フレペ　　しっかりしてるさ！
ムサ　　みっともないことはしないで！
フレペ　　みんな出ていけっていうんだ！ここは俺の家で、このすばらしい光景は俺のものだ。そのバラを手にし、その縞柄のストッキングをはいた姿は、パール座の花形歌手以上だ！
ディサ　　この変態！
フレペ　　俺は夫だ。芳香に満ちた天使よ、お前に較べたらパール座の歌姫も形無しだ！医者も薬剤師も急いでやってきて、このすばらしい体に防腐処理をしてくれ！金に糸目はつけない。五千ペソやるぞ、ガラスケースによく映えるようにしてくれた者には。二言はない！フロリアナ、ガラスケースに入れてあげるからな！俺は夫だからお前を抱く権利があるんだ。みんなここから出ていけ！

さらにふらつきながら死者に近づく。ろうソクが一本倒れ、象牙色の手の中で、造花のバラが炎のバラのように燃える。死衣が燃え、お棺が燃える。シメオン・フレペは炎の中で死体を抱き、狂ったように叫ぶ。女たち、両腕を広げ後ずさりする。鍛冶場全体が火事の光で明るくなる。

洗礼者の首

マリオネットのためのメロドラマ

登場人物

新大陸帰りの成金ドン・イヒ

ペポーナ

アンダルシア訛りの男

小鳥のバレリオ

理容師

仕立屋

サルネスの小人

若者たちの音楽隊

赤と黄のスペイン国旗、新大陸帰りの成金のビリヤード酒場。スペイン男ドン・イヒ、かつて放浪した遠い土地で彼はこう呼ばれていた。ドン・イヒはカウンターの後ろで売上の計算をしている。肝臓を患った憂い顔の操り人形といった風情がある。ビリヤード場前の歩道では若者たちの輪ができ、お祭り騒ぎをしに出かけ、ポマード男ペピーニョの踊り場をめちゃくちゃにすることで話がまとまっている。黒い巻き毛にアイシャドー、頬紅をつけた大柄の女がカフェの奥で猫と戯れている。その背後ではガラスのドアが光り、レモンの植込みには月明かり。星降る夜で、あちこちの酒場ではアセチレン灯のメロドラマ風な明かりの下、ギターや歌、口論やトランプ。ビリヤード場の入り口の前では、若者たちがギターの調弦をしている。小鳥のバレリオ、ギター越しに首を伸ばす。

バレリオ　　まず最初は司祭の家だ。あいつをカッカさせるような卑猥な歌を歌わなくてはな。

理容師　　司祭は誰も非難してないよ。

バレリオ　　あいつの説教に傷ついてる人もいる。同棲してるからって、あいつとどんな関わりがあるってんだい？

仕立屋　　バレリオ、お前ドン・イヒからいくらか貰ってるな。

バレリオ　　ドン・イヒは自由思想の持ち主だから、くだらない説教など笑い飛ばすさ。

サルネスの小人　ペポーナは女だから教会の指弾を受けて参ってる。

仕立屋　　当然だよ！

バレリオ　　あの司祭だけでなく、すべての司祭は反啓蒙主義を唱え、誰ひとりとして本来の使命である平和の布教をしない。ここで

は今イギリス人のような人間が大いに必要になっているんだ。

理容師　もう調弦はすんだか、バレリオ？

バレリオ　俺のことだったらまかしとけ。

理容師　最初はいつもの道順をとるべきだと思うけど。

サルネスの小人　賛成！町の人に対する挨拶がわりにね。

理容師　その通り。

バレリオ　ペペと名のつく者は何人いる？

サルネスの小人　そうだな、書記、中尉、検事のドン・ペペ・ドウエニャス、合唱団の団長ドン・ペピート、ドニャ・ペピータ・プエンテ、それからペピティーナ・ルア。どの通りにもペペがいるよ。三人いる通りもある！

バレリオ　これはたまげた、お前さん、ずいぶんと詳しく知ってるんだなあ！

ガウチョ風の装具をつけた茸毛の馬に乗った男が街道をやってくる。ポンチョ、ソングレロ、よく響く拍車をつけた乗馬靴。虚勢を張りながら馬から下りる。

アンダルシア訛りの男　やあ、みんな！この町はずいぶんとご機嫌のようだが、何かあるのかい？こんなこと聞くの、変に思わないでくれ、俺はよそ者なんでね。

バレリオ　そうだよ、あんた、これから大いに楽しむのさ。

アンダルシア訛りの男　アルベルト・サコも仲間に入れてくれ。

バレリオ　アルベルト・サコさんとやらは何ができるんだい？

アンダルシア訛りの男　アルベルト・サコは、どこへ行っても一番だった！

バレリオ　あんた、そんなに多くの町には行ってないだろう、各地を渡り歩いたりしてないだろう。

アンダルシア訛りの男　俺は地球の隅々まで歩き回ってる。新大陸からきたんだ。

小鳥のバレリオ、パンパのガウチョをまね、親しみをこめて手を差し出す。相手も同様のしぐさで握手する。

バレリオ　おい！あんた新大陸からきたんか？アルゼンチンのパンパに

行ったかい？

アンダルシア訛りの男 ホーン岬からベーリング海峡まで、行ってないところはないよ！

バレリオ むこうはどこも金を稼ぐにはいい土地だ。みんな稼いでも使ってしまうけど、儉約家は金持ちになる。ドン・イヒがいい例さ。

アンダルシア訛りの男、鞭で乗馬靴を叩きながらビリヤード場に入り、高慢な様子で巻き毛の女に近づく。

アンダルシア訛りの男 ねえちゃん、ちょっと店の主人と話せるかね？

ペポーナ なにか取引のこと？

アンダルシア訛りの男 まだ済んでない支払いの話だよ。

ペポーナ あんた、この国の人ではないわね？

アンダルシア訛りの男 俺は各地を渡り歩いてきた。

ドン・イヒ、好奇心をそそられカウンターに出てきて、腕を組み、ペンを耳にはさみ、眼鏡を禿頭にのせた格好で、くつろいでもたれかかる。猫が大柄な女の腕からすり抜け、鳴き声ひとつあげず、しなやかな身のこなしでカウンターをよじ登り、靈感を吹き込もうとするかのように店主の傍らに来てすわる。

ドン・イヒ トルーカで暮らした二十七年間、誠実と労働がわしのモットーだった。それが人間の宿命なんだ！いざ商売を人手に渡し、隠居しようというときに、革命が勃発した。毎日が野戦、それから列車の襲撃ときた！スペイン人はポルフィリオ派に肩入れしていたから、大変な苦境に立たされたよ。

バレリオ そういったことは、旦那、外国では日常茶飯事です。あなたもご存じのはずだ。

ドン・イヒ わしはどこにいても熱烈な愛国主義者だった。どの国よりもスペインが一番だった！

アンダルシア訛りの男、巻き毛の女に秋波を送ってから、カウンターのほうに歩いていく。女は彼が店主と何を話すのか聞き取ろうと耳をそばだてる。ただ聞こえ

てくるのは声をひそめた話し声だけで、ランプの明かりの下、ふたつの歪んだ蒼白な顔がみえる。ドン・イヒはびっくりした操り人形のしぐさをする。髪を逆立たせ、青ざめ、おどおどした様子で口元に指を一本持っていく。

アンダルシア訛りの男 俺が誰だかわからないと思ったがな、ドン・イヒ。

ドン・イヒ お前はそんなに変わってはいないよ。

アンダルシア訛りの男 だが、最初はわからなかった。

ドン・イヒ 自分の名前は捨てたのか？

アンダルシア訛りの男 煩わしくなったんでね。

ドン・イヒ ずっと旅をしてるのだな。

アンダルシア訛りの男 そうさ、あんたはここに腰を落ち着いたのかい？

ドン・イヒ 働いても儲けはない。この町でカフェとビリヤードの店を出したのが運の尽き。ここのやつらにはモダンな生活というものがわからない。

アンダルシア訛りの男 あんた、店がうまくいってないって言うのかい？

ドン・イヒ 破産同然だよ。

アンダルシア訛りの男 それじゃ金がないとでも？

ドン・イヒ 素寒貧もいいところだよ。

アンダルシア訛りの男 信用貸しは受けられないのか？

ドン・イヒ だめだ。

アンダルシア訛りの男 俺は現ナマをいただきにきた。

ドン・イヒ そう言ってくるのを待っていたよ！

アンダルシア訛りの男 ドン・イヒ、金を受け取らずには帰らねえぞ！俺は覚悟を決めてきているんだ。

ドン・イヒ 頭を冷やしてくれ！

アンダルシア訛りの男 俺たちの関係をバラしてやる。

ドン・イヒ 待ってくれ！

アンダルシア訛りの男 俺は有罪の宣告を受けているが、タレ込めば罪を帳消しにしてももらえるかもしれないんでな。

ドン・イヒ 馬鹿なことはするな！

アンダルシア訛りの男、ビリヤード場の奥を見ようと振り返った。皺を寄せた眉間の下で燐光を放つ大柄な女の目の磁力を感じ取ったからであった。するとペパは

舌先で唇を舐めまわしながら彼に微笑みかけ、好色そうなウインクで応じた。ビリヤード場前の歩道では若者たちの音楽隊がギターの調弦をしていた。

アンダルシア訛りの男 ドン・イヒ、あんたいい女と一緒にじゃないか！

ドン・イヒ すごく身持ちのいい女だよ！

アンダルシア訛りの男 前の女のようにバラすつもりか？

ドン・イヒ 黙れ、この悪党！

バレリオ おい、あんた、さっきギターが欲しいと言ってたけど、もう
いないのかい？

アンダルシア訛りの男 アルベルト・サコに二言はない。ドン・イヒ、ま
たあとでな。

ドン・イヒ わかったよ。今は楽しんでくれ。

アンダルシア訛りの男 おい、ギターを貸してくれ！亭主、出掛けにみんなに一杯飲ませてやってくれ。俺のおごりだ。

サルネスの小人 そらギターだ、アルベルト・サコ、よく調弦してあるよ。
お前さん、いい弾き手のようだね。

バレリオ アルベルト・サコ、あんたいい度胸だな！

騒々しい冷やかかし声。若者たち、ビリヤード場前の歩道でギターを調弦し、弾く。
その後、田舎風のマズルカを演奏しながらそこから出発する。大柄な女が猫と
スペイン男の目の前で縞柄のストッキングをあらわにしてガーターをつける。

ドン・イヒ お前がいま会ったあの野郎、わしに拳銃を握らせる気だ。

ペポーナ あら、それは面白いじゃあないの！

ドン・イヒ こんな切羽詰ったときに、何ていう言い草だ。

ペポーナ それもそうね。

ドン・イヒ で、あいつが誰かも聞かないのか？

ペポーナ 新大陸時代の知り合いでしょ。

ドン・イヒ まさに悪魔みたいな奴だ！

ペポーナ それで、何しにきたの？

ドン・イヒ わしを破滅させにだよ！

ペポーナ 命をよこせていうの？

ドン・イヒ 金だ！

- ペポーナ あんた、ずいぶんと舐められたもんだねえ！
- ドン・イヒ あいつはわしの仇敵なんだ。それもこれもなぜかという、わしがあいつに汗の結晶を渡そうとしないからだ！自分で働けっていうんだ！頭を冷やせっていうんだ！金がどんなに価値のあるものか世間という学校で学べっていうんだ！あの悪党はわしを文無しにしようとしている！
- ペポーナ ひどい考えねえ！
- ドン・イヒ わしを破産させる気だ！
- ペポーナ そんなことさせないでよ！
- ドン・イヒ あいつにはもう何千という金を巻き上げられている！
- ペポーナ 泥棒もいいところだわ！
- ドン・イヒ 今夜また戻ってくる。
- ペポーナ で、店が閉まっていたら？
- ドン・イヒ 明日来るだろうよ。
- ペポーナ それじゃ、財布のひもをしっかりと結んでおけば？
- ドン・イヒ なにか偽証をしてわしを中傷し、わしの名誉を傷つけるだろうよ！
- ペポーナ あの男をすごく怖がっているのねえ！
- ドン・イヒ 当然だ！あの悪党のおかげでわしは数千という損失を出し、トルーカの事業を台無しにされたんだから。
- ペポーナ 怖いわ！あんた、あいつにどんな弱みを握られてるっていうの？
- ドン・イヒ ああ、身の破滅だ！
- ペポーナ イヒニオ・ペレス、あんた何か大きな犯罪を犯したのね！どんな秘密を隠しているの？頭を冷やして！何もかも話してちょうだいよ、あんたにすべてを捧げ、あんたを愛するために恥も外聞も捨てた女に！
- ドン・イヒ ほら、ドアを叩いてるぞ！
- ペポーナ 落ち着いて！音がしたのは猫がカウンターから床に飛び降りたからよ。
- ドン・イヒ あいつは戻ってくる！わしを一文無しにする気だ！
- ペポーナ でもどんなことであんたを強請ってるの、あのアルベルト・サコは？

- ドン・イヒ それは偽名だよ。
- ペポーナ イヒニオ・ペレス、あたしの胸にあんたの悩み打ち明けて！
あんた、どんな罪で訴えられているの？もしかして殺人？
- ドン・イヒ あの卑劣な中傷のせいでわしはトルーカの事業をやめるはめになった！あいつはわしの亡妻バルドメリータの連れ子だった！遺産を相続しようとして母親を殺し、このわしに罪をなすりつけたんだ！みんなそれを信じた、あそこでは成功したスペイン人すべてに憎悪を抱いてるからな！偏見でもって裁判官たちはわしに不利な裁定を下した！
- ペポーナ それで、有罪になったの？
- ドン・イヒ ^{ガチユビン}スペイン男を有罪にすること、これは裁判官たちの執念だった。偏見もいいところだ！すべてはあの悪党の中傷のせいだ。
- ペポーナ もういいわ！それであんた、有罪になったの？
- ドン・イヒ 理不尽にもな。それもこれもわしが死んだ妻の財産を抵当に入れていたばかりに判断がなされた。それであの親不孝者めはわしを恨んでいるのだ。あいつは母親を殺して財産を受け継ごうとしたが、そのような遺産なんてないことがわかった。そこでわしがひそかに相続したと考えたんだ。
- ペポーナ 仮にそうだとしても、ひどい話ね！
- ドン・イヒ 母親はわし以上にあいつのことを嫌っていた。子供のころからあいつは手のつけられない極道だった。どうしようもない放蕩者だ！かわいそうな妻よ、あれはわしが金を殖やしてくれると知ってすごく喜んでいて、金は日毎に殖え続けただろ！このような略奪、このような詐欺、このような強請りを続けさせてはならない！さっきも言ったように、あいつはわしに拳銃を握らせる気だ、わしは今にも気が狂いそうだよ！あいつは名前を変え、顔も変えているが、あいつの卑劣な根性だけは変わってない！
- ペポーナ あの男を見違えたようには見えないけど。
- ドン・イヒ 妻の歪んだ死顔をして見せたからな！
- ペポーナ まあ、何て罰当たりなことを！
- ドン・イヒ それを見て体が震えた！
- ペポーナ 一杯飲んだら。ちょっと熱があるのよ。

- ドン・イヒ 冷汗のせいだよ！
- ペポーナ お店を閉めるわ。
- ドン・イヒ あいつはわしの恥を触れて回るだろう！ここでのわしの信用はがた落ちになる！あいつと折り合いをつけ、少しは金を渡してやる必要がある！
- ペポーナ いっぺんに片づけてしまった方がよくはなくて？
- ドン・イヒ 死なないかぎりこの強請りは終わらないよ！
- ペポーナ じゃあよく考えなくては。イヒニオ・ペレス、まずはお金を渡さないこと！
- ドン・イヒ それで？あのごろつきがわしを中傷するのを放っておけというのか？
- ペポーナ それは程度によりけりだけど。
- ドン・イヒ よし、やってやる。一件をバラされても領事館の役人を買収してやる。貧乏になろうが、あのしつこい野郎にはビター文渡さない。
- ペポーナ 刑務所を甘く見ないで、それから財産を失うような危険もおかさないで。世間は落ちぶれた人間をあざ笑うものよ。
- ドン・イヒ そんな言葉、慰めにもならんよ！
- ペポーナ じゃああたしは口をつぐんでるわ。どうしたらいいかはあんたの方がよくわかってるだろうから。
- ドン・イヒ 首を吊ることさ。
- ペポーナ そんな大袈裟なことではないじゃないの！
- ドン・イヒ あいつ、わしのことを老いぼれと思っている。
- ペポーナ 老いぼれで臆病者とね。あんたときたらお金を盗られるのを黙認しているんだから。あんたのために恥も外聞も捨てた女に、何をしてあげたらいいかよく考えてよ。女にはあたしのよう盲目になる者もいるのよ！あの男、いくらよこせて言ってるの？
- ドン・イヒ まだそれは言っていない。
- ペポーナ さっき拳銃でかたをつけるとかなんとか、あんた言ってなかった？
- ドン・イヒ 言っただけ！わしはあいつの手中にある、死なないかぎりこの一件はかたがつかない。

- ペポーナ まさにあたしの言いたいこと！でも、どうしてあんたに目をつけたのかしら？
- ドン・イヒ わしを老いぼれと思っているんだ！
- ペポーナ このあたりでは誰もあの男は知らない。今日通りがかり、明日は姿を消す。
- ドン・イヒ 死んだ妻の目つきをしている。あの目をみるとわしはすくんでしまう！
- ペポーナ あのアルベルト・サコはさっきあたしに色目を使っていた、だからまたそう思う。そうしている間に、あたしがあいつをしっかりと抑えて何か合図を送るわ。
- ドン・イヒ ばあさんの歪んだ死顔をしなければいいが！
- ペポーナ 飲んでよ、怖じ気を吹き飛ばすために。一杯飲んで景気をつけて。船乗りみたいにラムのジン割りを飲めば元気がグッとつくから。
- ドン・イヒ お前の計画を実行するには、しらふでいる必要がある。
- ペポーナ 後ろから刺すのだからしくじりっこないわ。さあお飲みよ！
- ドン・イヒ わしの考えを見通してるようだな。
- ペポーナ あの男があたしに色目を使ったら、しっかりと抑えて合図を送るわ。
- ドン・イヒ 好都合なことに、最近ナイフを研いだばかりだ！
- ペポーナ おかみさんをバラしたんだったら、怖じ気づかずに自分の仕事をやり遂げることね。
- ドン・イヒ レモンの木の下に埋めればいい、痕跡も残らないだろうよ。
- ペポーナ どう、命拾いした思い？
- ドン・イヒ ペピータ、これでわしらは永久に離れられないな！
- ペポーナ それが重荷？あたしが何か求めた？あたしはあんたの奴隷よ、何も見返りを望まない。あたしに飽きがきたら、トランク一つであたしを通りに放り出すんだわ。
- ドン・イヒ すぐにお前の尻に敷かれるさ。
- ペポーナ まだあたしを信用しないの、あんたへの愛でがんじがらめになっているっていうのに？捕まるときは一緒よ。
- ドン・イヒ その通り！捕まるときは一緒だ。その通りだ！わしを裏切ることなどできまいよ。お前は天使のように優しい女だから！

ペポーナ あたしは何も見返りを求めずにあんたを助けるの。あたしに飽きがきたら通りに放り出すんだろうけど。

ドン・イヒ イヒニオ・ペレスは紳士としてお前に報いるつもりだ。

ペポーナ あたしは何もいない。

ドン・イヒ 良心に従い、お前を教会に連れていくつもりだ。

ペポーナ そんな気がねはいらないわ。

ドン・イヒ キスしておくれ。

ペポーナ いやよ。

ドン・イヒ かわいい^{やつ}女だ！

ペポーナ そんなの幻想よ。

ドン・イヒ 幻想と健康は富以上に価値がある。さあ、キスしておくれ。邪険にしないでおくれ。

ペポーナ あとでね。

ドン・イヒ あとでふたりで宴会をしよう。

ペポーナ あまり調子に乗らないで！

ドン・イヒ なあ、お前、レモンの木の下に穴を掘らなければ。

ペポーナ とても深い穴をね。

ドン・イヒ 人の体が入る。冷静でなくてはいかんぞ。

ペポーナ それはあたしがあんたに言うこと。

ドン・イヒ なあ、お前、キスをしていっておくれ。

ペポーナ それに見合うことをしたらね。

ペポーナ、腕まくりをして月明かりの裏庭に出ていく。新大陸帰りの^{ガチュビン}スペイン男、収支決算をしようと帳簿をとる。遠くから歌の終曲が聞こえてくる。パソドブレを掻き鳴らすギターの音が通りを下ってくる。その長短脚のリズムに合わせ、ごった返した足音が下ってくる。浮かれ騒ぐ若者たちの声。戸口の前に音楽隊の気配がし、替え歌を歌おうと小声で音合わせをする。アルベルト・サコ、弾き語りを始める。

アンダルシア訛りの男 亭主 鍵をはずしてくれ
俺たちが 散財をしにきたから
ワインで口を濡らし
お休みの挨拶をしにきたから

うまく歌ったと拍手喝采が起こる。そのあとまた静寂が戻り、別の歌の音合わせという韻律の問題に戻った音楽隊の気配がする。ドン・イヒ、引出しから金の袋を二つ取り出し、床板の下にそれを隠す。青ざめ、おびえた猫のように髪の毛を逆立て、裏庭に通じるドアに向かう。夜のレモンの木の下、鋏の音が聞こえる。

ドン・イヒ おい、聞こえるか、ペピータ！急いでくれ。
ペポーナ せかさないでよ！

ペポーナ、月光にきらめく鋏を高くかかげて現れ、敷居のところで何事かと訝る険しい顔つきで立ち止まる。ドン・イヒ、指を一本口に当てる。若者たちの音楽隊がバロック風で庶民的な詩想の歌を歌う。

浮かれ騒ぐ若者たち 窓から顔をお出し 娘さん
 僕らは 歌を聞かせにやってきた
 キューピッドの園の
 こよなく美しい薔薇の君に

ドン・イヒ 気をつけろ！土を掘る音が聞こえるぞ。
ペポーナ 岩のように固いのよ。
ドン・イヒ 最近雨が降ったのにか。
ペポーナ ナイフを隠し持って。
ドン・イヒ あの歪んだ死顔を見せられるとぞっとする。
ペポーナ 開けてやって。でも、ああ、ちょっと待って。

ペポーナ、髪を撫でつけ、腰を振って歩き、窓に近づきクレモン錠を少し開ける。月光が差し込む。ペポーナ、ギターの音に民衆的でロマンチックな感興を覚え、歌を聞こうと星の夜に身を乗り出す。

アンダルシア訛りの男 ねえちゃん、ドアを開けてくれ。
ペポーナ あんた、もう寝る時間だとは思わない？
アンダルシア訛りの男 それはあんたの旦那の考えかい？
ペポーナ あたしにはそういう暴君はいないわ。
アンダルシア訛りの男 じゃあ、パトロンの。
ペポーナ 店の主人のとおりよ、その話はもうおしまい。

アンダルシア訛りの男　じゃあそういうことにしよう。その男を呼んでくれ、別嬪さん。

ペポーナ　どういふことで？

アンダルシア訛りの男　アルベルト・サコのことだよ。

ペポーナ　それ本当にあんたの名前？それで、何を切りサコうっていうの？腸^{はらわた}かい？

アンダルシア訛りの男　あんたの舌をちょいittoね。ずいぶんと旨いだろ
うな！

ペポーナ　馬鹿なこと言わないでよ！

アンダルシア訛りの男　そんな色っぽい目で見ないでくれよ、ねえちゃん！

ペポーナ　あんた、女のくどき方を知ってるわね！

アンダルシア訛りの男　これまで女になど興味はなかった。

ペポーナ　あんた、そんな嘘は通用しないよ。

アンダルシア訛りの男　優しい言葉をかけてくれ！

ペポーナ　みんながあたしたちを見ているわ！

アンダルシア訛りの男　ドアを開けてくれ。

ペポーナ　あとでひとりで来て。

ペポーナ、窓から身を引き、閉める。両手を腰に当て、暗いビリヤード場を横切る。ドン・イヒは額に眼鏡をのせ、髪を逆立たせ、カウンターの上に両肘をついてその様子を窺う。猫が彼に何か耳打ちする。

ドン・イヒ　あいつを追いやったか？

ペポーナ　今帰ったけど、あとでひとりで戻ってくるわ。もうこっちのものよ。

ドン・イヒ　お前になんて言った？

ペポーナ　あたしを口説いたわ。

ドン・イヒ　お前、そうされるようなことしたんだろう。

ペポーナ　やきもちなんかやめて、こんな時に。

ドン・イヒ　あいつなんか恐れるに足りない。あいつはお前に何も与えられないからな。あいつと一緒に行って各地を渡り歩いても、どんな得がある？苦労だけだ！金のない男は決して女を幸せにはできないんだ。

- ペポーナ　くだらないことくどくどと言うのやめて、イヒニオ・ペレス！
ドン・イヒ　これまでのように、お前に言っておく、ペピータ、よく考えろ、馬鹿なまねはするなって。
- ペポーナ　よく考えているから、あのアルベルト・サコの強請りに対抗しようというのよ。あいつにあたしを口説かせておいて、あんたは目も耳もふさいでいればいいわ。あたしがあいつを抱くのを見ても、動かないで、あいつにナイフを突き刺すチャンスがくるまではね。今夜が最後よ、あの新大陸の亡霊があんたからお金を強請るのも。
- ドン・イヒ　これからその算段をつけよう。
- ペポーナ　ナイフは袖口に隠しておいて。店に入ってきたら、酒を勧め、三人で乾杯しましょう。あんた、気にしないでね、あたしたちが仲良くしても、あいつがあたしを口説いても。忘れないで、あいつを無防備にさせるのがあたしの役目だっていうこと。ほら、やって来たわ。
- ドン・イヒ　誰が開ける？
- ペポーナ　あたしが開けるわ。酒を勧めること忘れないで。
- ドン・イヒ　あのごろつき野郎、また俺を破滅させる気だ！

ペポーナがドアを開けると、戸口にアルベルト・サコが現れる。金属光を放つ鞭の握りでポンチョのすそを上げる。友だち面をし、ふてぶてしい態度で店の中に入る。

- アンダルシア訛りの男　別嬪さん、その色っぽい目で見てもらいにきたよ。
- ペポーナ　爺さんがこっちを見ているわよ！
- アンダルシア訛りの男　やあ、ドン・イヒ、今晚は。
- ドン・イヒ　よく来た。その娘に店を閉めてもらおう。一杯飲んでくれ。
- アンダルシア訛りの男　毒じゃないだろうな？
- ペポーナ　三人で乾杯しましょうよ、出会いを祝して。
- アンダルシア訛りの男　あんたと俺のな。店の主人とは初めてじゃないから。ドン・イヒ、そんな憂鬱そうな顔するなよ！
- ペポーナ　あんた、何を飲む？
- アンダルシア訛りの男　あんたが一番好きなのを。

ペポーナ　　当ててごらんよ。
アンダルシア訛りの男　それじゃ息を嗅がせてくれ、当てるから。
ペポーナ　　まあ、おもしろいこと言うわねえ！
アンダルシア訛りの男　ドン・イヒ、この女は年寄りにはもったいないよ。
ドン・イヒ　失敬なこと言うな。
ペポーナ　　ほら、旦那さんが文句言っているわ。
アンダルシア訛りの男　ドン・イヒ、ちょっと憂鬱そうだな。こんないい女給がそばにいるというのに、よくないぞ。
ペポーナ　　もう黙って、一杯飲んで。このボトル知っている？
アンダルシア訛りの男　もちろんさ！
ドン・イヒ　店で一番高いやつだ、混ぜものが入ってない。
アンダルシア訛りの男　これは三流品だよ。
ドン・イヒ　それは知らないからだ。
アンダルシア訛りの男　ドン・イヒ、そんな商売をやってるんだったらぼったくりもいいところだな！
ドン・イヒ　言い返す気にもなれない。
ペポーナ　　けちばかりつけてないで飲みたいものを言ってよ。
アンダルシア訛りの男　冗談だから勘弁してくれ。その飲物は最高級品だ。
ペポーナ　　じゃあ乾杯しましょう。
アンダルシア訛りの男　そして愉快にやろう！ドン・イヒ、俺はすぐにあんたの前から消えるよ。
ドン・イヒ　だが夢に出てくる。
アンダルシア訛りの男　この娘に話したのか？
ドン・イヒ　お前が誰かもう知っているよ。
ペポーナ　　用件は明日にして、もう寝る時間だから。あんた、泊まる場所を探す必要はないからね。さあ、一気に飲み干しましょう！
アンダルシア訛りの男　手際のいい女だな、あんたは。
ペポーナ　　あたしのグラス取らないで、秘密を知られてしまうから。
アンダルシア訛りの男　それはもうあんたの目が俺に打ち明けたよ。
ペポーナ　　厚かましい人ね！
ドン・イヒ　お前がそうさせているんだ！
ペポーナ　　何言ってるのよ！

アンダルシア訛りの男 ドン・イヒ、三千ペソ数えるんだな。

ドン・イヒ お前、どうかしているぞ！

アンダルシア訛りの男 もっと要求しようと思っていた、だがこの娘を連れていくので、その金額で許してやるよ。

ドン・イヒ 誰を連れていくって？

アンダルシア訛りの男 ここにいるねえちゃんだよ。

ドン・イヒ ペピータ、嫌だって自分の口から言ってやれ。

ペポーナ いつもこんな風で大袈裟になるんだから。

アンダルシア訛りの男 ドン・イヒ、金を取ってこいよ、それからこの娘のことはもうかまうな。このねえちゃんは俺がもらっていくよ。このような女はあんたには向かない。

ドン・イヒ 厚かましいやつだ！

ペポーナ ねえあんた、冗談はそのくらいにして、仲良く飲みましようよ。旦那さんとの用件は明日かたづけることにして。

アンダルシア訛りの男 この女は俺を丸めこむつもりだ！ドン・イヒ、さっさと金を数えろよ、もう馬に鞍をつけてあるんだから。

ドン・イヒ 小切手で渡すよ。でもあんなに多くは出せない！

ペポーナ その話は今夜はもうおしまいのはずよ。

アンダルシア訛りの男 ねえちゃん、ここはあんたの出る幕じゃあないよ。
ドン・イヒ、小切手帳を取って来いよ、俺様に早く退散して欲しかったら。

アンダルシア訛りの男、こう言ってから舌を出し片目をつぶる。それは母親の歪んだ死顔である。ドン・イヒ、ためらいがちな足取りで階段の登り口に行く。不意にガラスの割れる大きな音がし、ドン・イヒ、操り人形のようなしぐさで振り返る。やくざな若者、ドン・イヒの情婦の腰を抱きしめ、キスをしようとする。あばずれ女が目が燃える。ポンチョの襷の中から片手を出し、人差し指でアンダルシア訛りの男の背中を刺す真似をする。指輪がきらめくその指は鋭く尖っている。ドン・イヒ、袖口に隠し持ったナイフに気づく。ナイフの先が、操り人形の皺だらけの指の間から、ゆっくりと気づかれないように頭をだす。事物の法則と行動のリズムが変化したかのようにみえる。夢や死におけるがごとく、時間の法則が変わったようにみえる。情婦、相手に身をゆだね、溜め息をつく。白い手が若者の太陽と汐に焼けた首にからまる。蒼ざめた亡霊のようなドン・イヒが振りかざすナイフのきらめき

に、ペポーナの動揺した目が細く締まる。ペポーナ、気が遠くなる中で、自分の唇の上でアンダルシア訛りの男の唇が冷たくなるのを感じる。

ペポーナ 最高の男だわ！

ドン・イヒ さあ、今すぐレモンの木の下の穴を深く掘らなければ！

ペポーナ あんたの血であたし真っ赤だわ！

ドン・イヒ 背広は燃やしてしまわなければ。

ペポーナ もう一度キスして、石のように冷たい唇よ！

ドン・イヒ おい、死体に話しかけるな。

ペポーナ 最高の男だわ！あたし、あんたが生き甲斐をくれた時にあんたを殺してしまった！

ドン・イヒ お前、何をしているんだ？殺したあと、口にキスなんかして。

ペポーナ 唇をかんでやるわ！

ドン・イヒ 馬鹿なことをするな！

ペポーナ 唇にかみつки、キスをするわ！老いぼれ悪党のあんたなんかよりずっといい男だった！

ドン・イヒ げすな売女めが、ぞっとするようなこと言うな！

ペポーナ さっさとレモンの木の下を掘るがいいわ、この悪党！あたし、この体に抱かれて土の中に行きたいわ！もう一度キスをして、最高にいい男！キスをしてあげるからあたしにもして、硬直した顔！あんたに抱かれて土の中に行きたいわ！こんなにも見知らぬ人が、こんなにも！……あたしの腕の中で死ぬためにやってきたなんて、あんなに遠くから！……あんたは幻影？唇をかんでやるから！いとしい人、この悪夢からあたしを醒まして！

ドン・イヒ ああ、こいつと金で折り合いをつければよかった！